【実践報告】入所施設建設の実践

実践に学ぶ

子ども達が自分達の家を創る
――知的障がい児施設天草学園の取り組み

建築家 松村 正希

はじめに

熊本県天草市に在る福祉型障害児入所施設天草学園（1966年設立，以下学園と呼ぶ）．ここには，知的障がい児，虐待，育児放棄，貧困，家庭内暴力等さまざまな理由で親と切り離さざるを得ない子どもや乳児院から措置されてきた子どもが，社会に巣立っていくための力をつけるために暮らしている．そのような子ども達が，学園の改築にあたり「家作り」に参加する貴重な体験をすることになった．

きっかけは，私の講演を学園の副園長（当時）が聞いておられた時の出会いである．学園は，つぎのような要望をもっていた．旧園舎は築40年が経ち隙間風が入り子ども達の気持ちを萎えさせてきた．建て替えを契機に子ども達を元気にする環境に改善したい．子ども達はよく玄関で親が迎えに来るのを待っているが，帰れる家がない．学園を自分達の家であり帰ってくる所だと思ってほしい．そして，学園を出た後，自活をするためにも，子どもの頃から少しずつ食事準備，洗濯，掃除等の家事を覚えていく必要がある．さらに，男子・女子間で問題がおこらない空間を考えると共に，家庭的な居心地のよさと，見守りしやすさを考えた建物にしてほしい．また，いろんな課題と問題を抱えた子ども達なので，その事を理解をした上で設計を進めてほしい．

まつむら まさき
（株）莫設計同人

この学園の要望を実現するために私は，「子ども達と共に創る学園」を提案した．具体的には，職員と意見交換するだけでなく子ども達も要望を出し設計図の検討から工事の打合せにも子ども達が参加して，インテリアの決定まで主体的に取り組んでいく，自分達の家を創る試みを開始した．コンセプトは，『子ども達が自分たちの家を創る．そして，自分の弁当は自分で作る』．子ども達が声を出し，安心して一番安らげる「家」を創るこの試みに，親と暮らせない厳しい現状を抱えた子ども達が社会に出て行った時も，自分達が中心となって家を創ったという事実に自信を持って生きていってほしいとの願いをこめ，その2年4カ月にわたるプロセスを報告するものである．

1 施設の概要

障害児入所施設は，家庭で暮らすことが困難な，原則18歳未満の障がいのある子どもを保護する施設である．福祉型と医療型に分かれており，2012年度現在，全国234施設あり6,042人が暮らしている．

学園は福祉型で，入所児の学年は**表1**の通りである．

入所理由は，虐待，養育放棄，貧困，親の離婚，死別等家族の状況によるものが16人．強度行動障害，兄弟とも障がい，生活習慣の確立のため等，障がいの状況で入所している子どもが18人である（2013年10月時点）．

一般的に知的障がい児の入所施設は知的障がいの子どもより軽度発達障がいの子どもが多い傾向

である．熊本県内全域から入所してきている．

2　職員とのワークショップ

設計を進める前に，職員とワークショップ（**写真1**）とアンケート調査を行った．アンケートでは，子どもの集団は5人ずつのグループがよいという意見が多かった．その構成については，男女で分けてさらに能力別のグループで分ける．知的・精神等の障がい別に分けるという声や同学年，若しくは近い学年でグループ分けをする方法や，縦割りで男女別のグループ分けと年少の子どもを中学生・高校生が世話をするという形がよいのではないかとの声もあった．だが，反対にいろんな状態の子ども達であるから，全員をグループ分けにはできないという意見もあった．

居室は，男女で棟を分けて間に職員室や食堂を設ける．2階は自立棟として中学生以上と自立度の高い子どもが暮らし，居室は原則個室とするが2人部屋も設ける．中学生以上の男子と女子の間は共用スペースや職員室・医務室・学習室等で区切り，各々が直接行き来できないようにする．その上，職員から見えやすい場所に学習室等共用のオープンな空間を設けて圧迫感や抑圧感のない空間が必要ではないかという意見があった．

台所は，メインの台所と子ども達が使える台所がほしいとの意見が多かった．さらに，自立度の高い子ども達のゾーンに台所を入れて時々調理実習をさせ，社会に出て行った時，食生活の面からも支援していくためにも必要であるとの声があった．だが，台所には包丁などもあるのでオープンにすることは難しいと課題も明らかになった．

食堂は，全員が一堂に会して食事ができる食堂と部活動で遅く食事をする子ども達のことも考えて7～8人くらいで食事をする小食堂があればよい．だが，別の考えとして，1階に男女棟に各1ヵ所大きな食堂を設けて，2階には自立用のキッチンと食堂が必要という意見もあった．

洗濯は，中・高校生以上でできる子と自立度の高い子どもは自分で洗濯をして干すことが必要という考えであった．

表1　学園の入所児構成（2013年10月現在）

区分	未就学	小1	小4	小5	中1	中2	中3	高1	高2	高3	卒業生	総計
男		1		1	1	3	1	1	5	4	6	23人
女	1		1			1	2	1	4	1		11人
計	1	1	1	1	1	4	3	2	9	5	6	34人

写真1　ワークショップの光景

浴室については，男女別の浴室と，将来の社会生活に向かってユニットバスが男・女1ヵ所ずつ必要である．それに，部活などで遅くなった子ども達に対応する環境があればよいという意見と，各グループに家庭用の浴室があれば特に大浴室はいらないという声もあった．

3　小規模グループケアの導入

障がい児の入所施設については，自立体験ができることや，グループホーム・ケアホーム的な住まいの在り方について検討すべきと厚生労働省の2008年の障害児支援の見直しに関する検討会報告書にも提言されている．

私は特別養護老人ホームや知的障がい者入所支援施設で小規模グループケアを行える建物の設計を積み重ねてきた．その経験から，この環境は利点はあるが課題もあると考えている．だが，そのことも考慮して一部分を小規模グループケアができる環境とした．

4　自分たちの家を創るための子ども達の声

子ども達の要望はアンケートで答えてもらった．

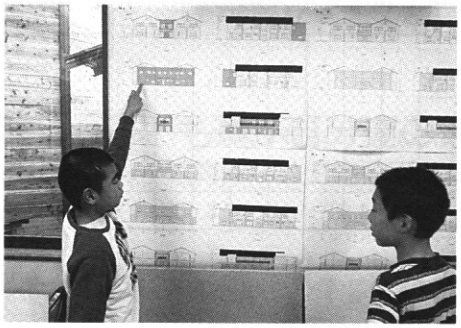


写真2 平面図・立面図の検討

居室は，男子は個室と友達と話ができる2人部屋がよいという声があった．中には，4人部屋でもよいとの声もあった．女子からは，1人の時間を静かに過ごしたいので個室がよいという声，1人だと怖いから友達と一緒にいたいので2人部屋がよいという意見もあった．

どんな部屋や場所がほしいかとの問いには，1階にお風呂やホール，2階に子ども部屋と居間，そして，皆で遊べる場所や男女で共同に使える部屋もほしいとの声があった．

食事は何人位で食べたいかを聞いてみると，3人位で食べたいという意見が多数であった．ご飯は多くの子ども達が作りたいと述べていた．しかも，自分で作ったら嫌いなものも食べると言い，調理実習室みたいな部屋がほしいという声もあった．

浴室は，女子は1人で入りたいとの要望が強く，男子は数人で入りたいと述べていた．

洗濯については，自分でするとの意見が多数であった．

写真3 台所の光景

5 ワークショップ等で共有した方針

職員や子ども達の要望と声を整理した．男女は別棟で2階に原則中学生以上と自立度の高い子どものための個室と2人部屋を設ける．低学年は4人部屋として1階に設け，男の子は女子棟で暮らすことも考えた．男子と女子の間は職員室・学習室等で区切り，各々が直接行き来できないようにした．子ども達の要望にこたえ，1階にお風呂とホール，2階に子ども部屋があって男女棟それぞれリビングを設ける．

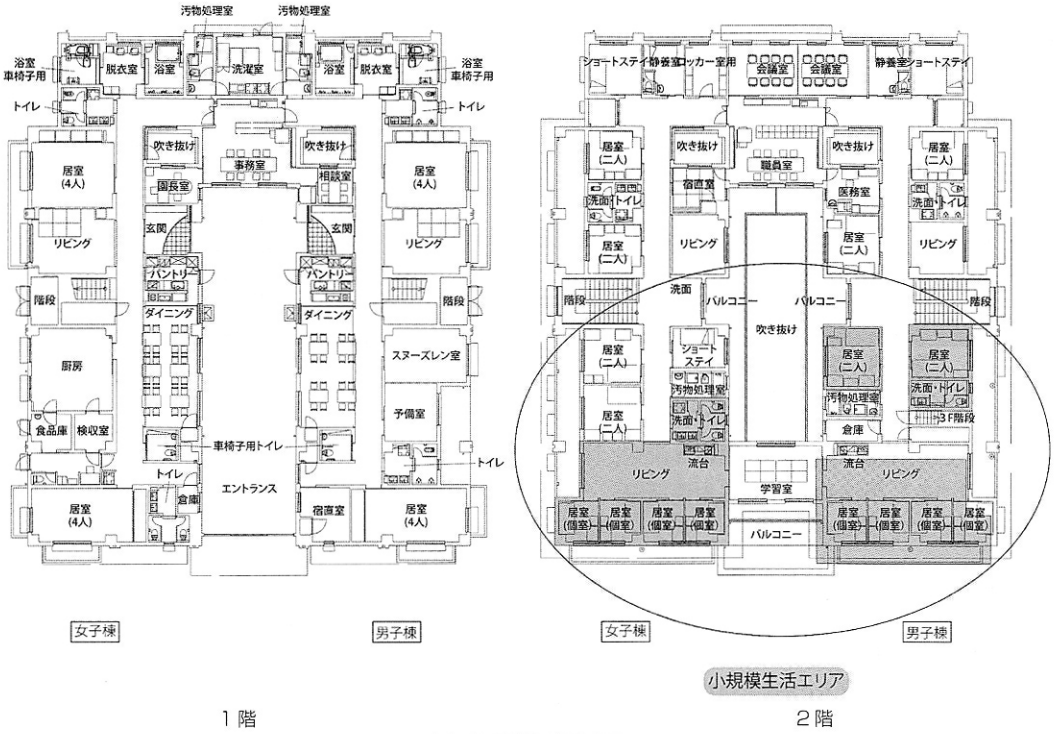
食堂は，1階に男女各1ヵ所台所が付いた食堂を設け，2階にも台所と食堂を設ける．ここは，部活動で遅くなった子どもが食事をしたり，措置延長になってここから働きに行っている子どもが，自立への練習を重ねる場所である．

風呂は男女別の浴室を設けた．

洗濯も自分でするとの意見を尊重して，それぞれに家庭用洗濯機も備え，自立に踏みだせるように環境を整えていった．

6 設計の基本方針

建物の正面に在るエントランスの扉は，厳しい扱いを受けてきた子ども達を守るとの強い意思表示である．正面に子ども達が帰ってきた時「お帰り」と声をかけるお母さん役の園長がいる事務所



1階　　2階

図　天草学園平面図

を配置して左右に男女棟の玄関を設けている．1階の各棟には，子ども達が使える台所と食堂，居間を配置した．特に台所は，食生活を支援していくために大切であると位置付けた．コンセプトの『自分の弁当は自分で作る』実践の場所であり，多くの子ども達がご飯を作りたいと述べていた声の反映でもある．

居室は，小学生以下の子ども達が寂しがらないよう4人部屋とした．2階は，中学生以上の生活空間として個室と2人部屋，そして子ども達の要望が強かった居間も設けている．さらに，一部分を高学年及び小規模グループ生活エリアとして，台所と食堂を含めた環境にして，自立への訓練の場にできるよう位置付けた．また，男女棟の間に学習室を設けて，静かな環境で互いに学びあえる場所とした．

浴室は車いす対応が可能な個浴と数人で入浴できる浴室を男女それぞれに配置している．

以上，子ども達や職員の声が反映され設計者が整理して到達した間取りが**図**である．

7　現場会議に参加して

工事に伴う打ち合わせにも子ども達は参加した．

普通ならばあり得ないことである．私達は「子ども達自身が創る自分達の家」という考えから積極的に子ども達の参加を促し，自分たちの意見を出してもらった．会議では施工計画書・工程表・質疑書等が配られた．専門的な用語や分かりにくい言葉は丁寧に説明した．工事現場にも入って自分達の家がどのように作られていくのかも見守った．技術面以外の議題については全て子ども達に意見を聞き，それを反映した．

内装の検討も子ども達が行った．サンプルや色見本等は学園に持ち帰り，会議に参加していない子どもの声も反映させた．1階は小さい子の部屋だからどんな色がよいか，皆で過ごす場所はどんな雰囲気がよいだろうか検討を重ねた．その結果壁やリビングの天井のクロスの色と模様は，女子

写真4 定例会議の様子

写真5 外壁の色彩決定の様子

写真6 椅子の製作風景

棟は星空，男子棟はクローバー模様と決定．ドアの取手や扉の色，手摺の色，便器や洗面器の色，足洗い場のタイルの色等細かなところまで意見を聞き，丁寧に子ども達の声を落とし込んでいった．

半年にわたる工事中，自分たちの意見が形になり，自分たちが選んだものが一つひとつ創られていくのを身近に肌で感じることとなった．

8 いろんな人をまきこんで

人まかせでなく，自分たちも手を動かし，家を創る．地元の陶芸家の協力を得て玄関扉，中庭デッキに埋め込む陶板を子ども達が作った．

テーマは「海」，天草の海．子ども達それぞれが思い描く海．陶板が天草の光に反射し，きらきらと海のように光っている．そのレイアウトも子ども達が決めた．

子ども達がいつも使う椅子は，一人ひとり好みが違うのだから，一人一脚ずつ好きな椅子があってもよい．自分たちの座る椅子は，座りよいように自分たちで作る．最初から作ることで，壊れた時も自分たちで修理ができる．そこで球磨工業高校の生徒と椅子の共同制作を行った．このことは，知的障がいの子ども達とふれあう機会が少ない高校生に大きな刺激を与えた．

空っぽであった中庭には，皆で草花を植えた．あえて自分たちで植えることで，共に育ちゆく中庭とした．

9 暮らしてみての子ども達の様子

職員の監察記録から**表2**に抜き出して述べる．

まとめ

一番信頼を寄せる親から裏切られた子ども達が，普通は経験しない「家を創る」という大きな事業に参加して，自分達が主人公であると自覚をするとともに，人を信頼することの大切さを学んでほしいという願いをこめてこの事業を進めていった．

「子ども達が自分たちの家を創る」取り組みは，子どもや職員に大きな刺激を与えた．

子ども達が落ち着き信頼を取り戻し，自分の良さを見つけ，自立に向かって夢や希望を持って生きていける切っ掛けになったのではないかと自負している．多くの人と家を創ることは，人を信頼

表2　新建設後の天草学園で暮らす子ども達

小規模グループケアで暮らす子ども達の様子

A君（19歳）（虐待で入所）

・虐待と経済的困窮で児童相談所に一時保護され，療育手帳が交付されて措置入所する．
・新園舎で生活を楽しむことにより，食事は他の子どもと話し合いをして，配膳や食器洗いの当番を決めるようになり，休日は自分で食べたいメニューを考え，買い物をして調理を行うなど，計画的に活動している．
・洗濯は，自分の洗濯物はするようになり，洗濯物の量が少ない時には，他の子どもに声をかけ一緒にする等の配慮もみられるようにもなった．そして，部屋のベランダに自分で干すようになった．
・掃除は，ほかの子どもと一緒に掃除を行う場所や当番を決めて，積極的に行うことで自分たちが生活する「家」といった気持が強く芽生えてきている．
・情緒面と社会性は，居室，居間，食堂等，生活空間が増えたことにより，対人関係のトラブルが減少してきた．しかも，小規模グループケアで暮らす友人と買い物に行く日など決めて自ら外出するような積極性がでてきた．また，学園外の友人を招いて遊ぶこともあり，行事に進んで参加する姿勢がみられるようになってきたとともに，職員や友人たちとの会話も増え，自分の意見が言えるようになってきた．

Bさん（高2）（育児放棄で入所・軽度の知的障がい）

・小学校5年生の頃，継父はBさんに対して一切の関わりを放棄した．養育困難となり，保護並びに生活訓練のため入所となった．
・生活習慣は概ねできているが，入浴，洗面，洗顔などの身辺処理が不十分であり，数回非行歴ある．入所当初は，両親の愛情をあまり受けていないため，常に職員の側におり，時には膝の上に座るなど幼さが残るコミュニケーションの取り方していた．自分の思いを表現できず，年少の利用児に泣かされるなど目立たない存在であった．
・小規模グループケアの新園舎に移ってきてからは，作りたてのご飯がたべられるようになり，笑顔が増えてきた．調理や手作りおやつの時間を非常に楽しみにしており，その事に意欲的に参加する姿が見られようになった．
・掃除や整理整頓ができるようになり，洗濯はすべて自分で行うようになった．
・情緒面や社会性は，自信がついたことで嫌な事はNOと言えるようになり，他の子どもにアドバイスも行う場面を見られるようになった．
・情緒が安定しない時やイライラする時は，居室でリラックスした時間を過ごす姿が見られるようになり，休日は自分で予定を決め友人と買い物を楽しんでいる．
・共有部分の掃除やタオル干し等，生活場面で進んで手伝いをするようになってきた．
・学習は，静かな環境の中で集中して取り組む事ができてきており，個室での生活を楽しむ余裕が見られるようになってきた．

小規模グループケア以外の環境で暮らす子ども達の様子

Mさん（中2男）（育児放棄で入所・重度の知的障がい）

・旧園舎で暮らしている時は自分で洗濯等を全くしなかったが，最近は自分で二階にある全自動洗濯機にて洗濯をし，干すところまでするようになった．だが，他人の物干しハンガーに干してしまったりするので，多少の注意は必要である．

Mさん（小5女）（虐待及び養育困難で入所・軽度の知的障がい）

・普通学校の特別支援学級に在籍．以前は宿題に取り組もうとしても，皆がいるホールで行ったせいか，集中力が続かずはかどらなかった．新園舎では，食堂のテーブルで行うことが多いが，他の子はリビングでテレビを見たりしているため，集中して取り組めることが多くなった．

＊第53回九州地区知的障害関係施設長研究大会（2013年）に天草学園職員が発表した「小規模グループケアの実践と課題」より

しなければできない．子ども達みんなで家を創った事実は，社会に出た時には大きな自信に繋がるのではないかと思う．

家庭に近い住環境は，家事を体験して自立生活へスムーズに移行でき，生活力の向上に繋がっている．情緒も安定してきていると思える．個室の確保でプライバシーの向上が図れるとともに，落ち着いた生活が送れるようになってきた．子ども達や職員は今後多くの問題や課題に直面することと思うが，話し合いながら工夫と努力を重ね臨機応変に対応し，「あたりまえの生活」を保障する目標に向かって進んでいきたいと職員は語っている．家庭に近い環境を整えることは，将来を見据えた子ども達への支援に大きく影響すると感じている．

皆と創ってきた家が完成し，夕食を食べている一人の子がつぶやいた．

「カレーライスが熱い…」

子ども達は，今までカレーライスをフウフウ言いながら食べたことがなかった．このつぶやきはカルチャーショックであった．また，別の子からは「これから新たな人生に旅立つ時に自分がどのような仕事をすればよいかを考えるきっかけとなった」と語った．

子ども達はひとりぼっちではない．多くの人達に抱きしめられている．天草学園は，頑張って生きてきた子ども達に，いついかなる時にも駆けこんでこられる扉が開いている．